

自然に学ぶ職業勉強人



マルチメディア事業

アステック株式会社

笠原 照明

私は、会社の方針としてこんな事を掲げている。

「可能性の追求」 & 「職業勉強人」

私たちの仕事は、勉強です。

私たちは勉強のプロとして、常に問題

に取り組みます。

私たちは勉強のプロとして、自己の向上に努めます。

そして、不可能を可能にするために、

何事にも果敢に挑戦します。

人の考え方は十人十色。二番煎じはしたくない。

そんな世の中に、ASTECにしかできないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

出来ないコトが、たくさんあります。

います。

また、個人の人生も「万事これ死ぬまで勉強」と思っている。

誤解しないで欲しいが、学生がしているような試験のための勉強は、ここで言う勉強ではない。「なぜ?」と感じた事を「なるほど!」

と思えるように努力する過程を「勉強」と言っているのである。「なぜ?」と感じなければならぬ!」もないのは単なる「記憶」である。

例えば、私は蕎麦が大好きであるが「山形の蕎麦は、何故おいしいのだろうか?」と感じ、今蕎麦のマーケティングリストに加入して、勉強している。同様に「山形の酒は何故おいしい?」と感じ、ある日本酒の会に参加して日本酒の勉強もしている。

あらゆる事に「何故?」を感じ、いろんな勉強をしているわけである。

また、私は会社と個人との関係に付いて、つまり会社のあり方について、以下のように考えている。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

会社とは、自己の能力を表現する舞台である。

る。

会社とは、自己の目的を達成するための機構である。

会社とは、社会に貢献するための団体である。

つまり、あくまで自己の人生があり、目的があり、それらを遂行するために会社と言う制度を利用すると言う事である。

これらの考え方は、すべての事柄を自己の責任において行いたい、つまり自由に行動したい。と言う考えから発生している。

私の価値観の最も中心になっているのがこの、自己責任によって裏打ちされた自由である。

ところで、私はいわゆるUターン組みである。

前の会社を辞める時に東京で一緒に会社をやらないかと言う誘いを受けた、しかし私はどうしても東京で生活するのが嫌だった。身の回りがすべて人工であり、自然が無かったからである。私は自然にこそ学ぶ事が多くあると感じている。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ

感じる。それに比べ人工の物には学ぶ



最近の代表的製品の1つ、リアルタイム画像圧縮ボード「RFV」

事は何も無く、あるのは責任転嫁の材料だけである。責任も無い代わりに、自由も無かった。例えば、自然の中では夏に暑いのは日差しが強い所であり、木陰や、水辺は涼しいと言ふ事が分かる。しかし、都会では夏の暑さは、クーラーが吐き出す熱風のせい、夜風が吹いていても、隣がクーラーをかけるとその熱風で熱くなるから自分も窓を閉め切つて、クーラーをかける。まったくばかげているではないか。そんな訳だから、私は仕事の内容を決める前に、都会ではなく自然の豊かな、田舎で生活する事を決めた。

私は、とにかく自然がすべての基本であると思っっている。生まれるのも、死ぬのも出来れば自然のままが一番である。そして、その基本に今こそ返るべきだと思ふ。自然に学ばず周りの人間に影響されては、今の閉塞状況からは、抜けられないのではないだろうか。適切かどうか分からないが、例として外国を替えてみて欲しい、外国を替の上では今や各国のデライアの互いの思惑で動いているのではないだろうか。こんな不自然な事はないと思ふ。この不自然さが弱い立場の国や、業界へのしわ寄せとなっているように思ふ。

本来、為替は川の水のごとく高い所から低い所へ流れ各国の物価や、技術・資産等のバランスを取るのではないのか。でも現状はまるで、有明の干潟を無理矢理閉ざした水門のようでもある。

自然がすべての基本である。当然私の生き方も自然を旨とする。自然に生きることは、自分が一番気持ちよくなる事を選択する事である。但し、わがままとは違う。何しろ自然は恐ろしいから、自然に歯向かえばしつぱ返しがあるので、自然と仲良くしつつ自分の一番気持ち良い場所を見つける事になる。

これを会社の運営に当てはめて考えてみる。

まず何をやるかであるが、自然界で生きていくにはまず、自分の身の回りにどのような食べ物がいつ頃何処にあるかを探さなければ生きていけない。仕事に当てはめるとこの場所で自分の

能力にあった事を探さなければならぬ。つまり、今、自分は東京ではなく山形に居る。その事のメリットは何かを考える。私の場合大学に勤めていた経験があり、当時山形では製品開発をする会社はほとんど無く、従って、県内では技術的に目立つ事が出来ると思つた。案の定、会社設立直後からテクノポリス財団等の助成等を何度も受ける事が出来、さらには行政の方からそのような話を持ってきて頂けるまでになった。

これからどうすべきか考えてみる。これまで開発してきた物を振り返るとこれも、バブルの影響があつたのかと思ふ物が多い。つまり不必要な物が多いのである。自然界では当然ながら不必要な物は淘汰される。従つて、これからの開発のテーマには自然に必要な物つまり「必然性のある物」を考えたい。自然界には人間の想像を絶するようなトンでもない物が存在する。しかし、すべての存在に必然性がある。そんな物を作ってみよう。

笠原 照明

1954年11月14日 山形市生まれ。
1975年鶴岡工業高等専門学校卒業。同年4月東北大学電気通信研究所文部技官奉職。1980年2月退所。同年3月東京のベンチャー企業に就職、画像処理装置の開発を担当。1983年8月退社。同年10月アステック株式会社設立 代表取締役役に就任、画像処理システムの受託開発業務開始。研究所などを中心に最先端の技術開発を請け負う。1996年4月マルチメディア事業開始。公共団体を中心にホームページの運営、CD-ROMの作製等マルチメディア全般の業務を請け負う。平成7年11月 中小企業創造的業務活動推進法の認定を受ける。平成8年6月東北アントレプレナー大賞受賞。